



特集

# 舍利浜とうつろ舟

## 江戸時代のUFOミステリー

私たちのまちが舞台となったミステリー『常陸国うつろ舟奇談』をご存じですか？ 近年になって新史料の発見が相次ぎ、注目を集めています。研究が進んでも謎が尽きない、不思議な魅力に満ちた奇談に迫ります。

### 実体のあるUFOミステリー

江戸時代、神栖の浜に宇宙人の乗ったUFOがやってきた――。いきなりそう言われても、荒唐無稽に聞こえるかもしれません。でも、このUFO伝説のもとになった『常陸国うつろ舟奇談』は、江戸時代の古文書がいくつも残り、民俗学の分野ではよく知られています。滝沢馬琴が『兎園小説』に記し、柳田國男が論文を書き、澁澤龍彦が小説のモチーフとし、今も多くのミステリーファンを引きつけています。文献によって細かい違いはありますが、兎園小説のあらすじは次のとおりです。

1803年(享和3年)、常陸国の「はらやどり」という浜の沖合いに円盤型の舟が現れた。舟の上部には窓があり、舟内には奇妙な文字が書かれている。異国人のような風体で

言葉の通じない女性が一人、大事そうに箱を抱えて乗っていた――。

現在までに、14編13種類(未確認・写本を入れるとほとんど多数)の古文書が見つかっていますが、それらには共通して円盤型の舟・奇妙な文字・謎の女性の絵が描かれています。この奇談について、うつろ舟研究の第一人者で岐阜大学名誉教授の



田中教授

田中嘉津夫さんは、「知り得る限り世界で唯一の、実体のあるUFOミステリー」と表現します。なぜなら、遠い昔に書かれた江戸時代の古文書に、UFOそっくりの乗り物の絵」という物的証拠があるからです。

### 『水戸文書』と金色姫、驚きの大発見

調査のため何度も神栖市を訪れて

いる田中さんは、私たちの身近なところで一体どんな発見をし、うつろ舟の謎に迫っていったのでしょうか。そのワクワクするエピソードをご紹介します。

田中さんがうつろ舟奇談の研究を始めたのは1998年ごろ。調査を進めるほど謎解きの面白さに魅了され、2009年には『江戸うつろ舟ミステリー』を出版しました。すると翌2010年、水戸に住む読者から、関係のある古文書を所有していると連絡が入ります。これが『水戸文書』で、後に驚きの発見へとつながります。

さっそく水戸へ行って現物を調査し、その帰りに神栖市の星福寺に立ち寄ったそうです。滝沢馬琴が星福寺の養蚕信仰のお札を書いており、

その版木を確認するのが目的でした。「その折、蚕霊尊(金色姫立像)を写真に撮らせてもらいましたが、当時はうつろ舟奇談が金色姫伝説に関連するとは考えておらず、特に詳しく調べませんでした」

神栖市日川地区は、6世紀中頃に金色姫が天竺(今のインド)から養蚕を伝えた、日本の養蚕発祥の地と伝えられています。蚕霊山千手院星福寺に伝わる金色姫伝説は、584年(欽明帝13年)に金色姫が流木に乗って日川に流れ着き、発見した漁師に養育され、後に変化し、白い蚕に生まれ変わって人々に養蚕を伝えたというものです。

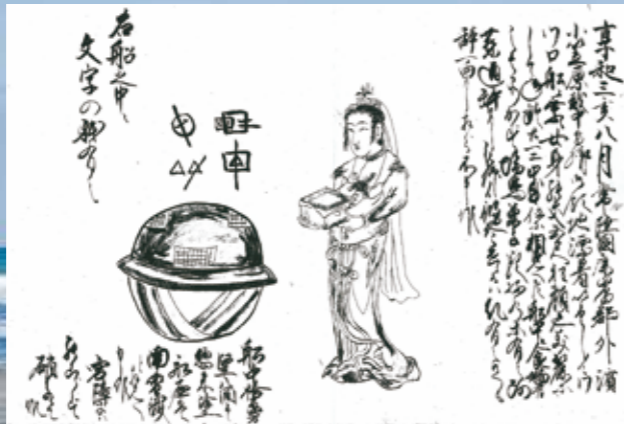
さて、岐阜に帰った田中さんは、蚕霊尊と水戸文書の写真を眺めていたとき、驚いて思わず声を上げました。



『漂流記集』に描かれたうつろ舟(部分、西尾市岩瀬文庫蔵)



『鹿島郡京舎ヶ濱漂流船のかわら板ずり』。史料の文中、中央やや右側に「舎ヶ濱」の文字が見える(船橋市西図書館蔵)



『水戸文書』(個人蔵)。描かれた女性の姿と蚕霊尊の特徴が酷似。金色姫伝説との関連性が高まった



『兎園小説』11集に記された「虚舟」。円盤型の舟・奇妙な文字・謎の女性が描かれている(昭和女子大学図書館蔵)



星福寺の蚕霊尊(金色姫立像)と厨子